

PLANGENTLY...

広がるは、麦の地平線。

轍わだちのくつきりと残る砂利道は、空の中へ消えてゆく。

やむことのない風は、西の方から、吹いてくる。

『豊作みのりの風』。地元で、そう呼ばれているこの風は、豊かな土と鳥たちを導く。そして、レンガ造りの風車は、その風をいっばいに受けて、止まることなく、四本の腕をまわし続ける。

麦秋むぎあきが近いのか、まっすぐ立った麦穂は、風に揺すられながら、いっばいの実を蓄えている。

少し薄い青空に、真っ白な雲が天へ延びていた。

右手、風上なる西には、夏になっても解けることのない白い雪をかぶった連峰が、南北へとまっすぐ延び、西の青空を支えていた。

ガチャリ、ガチャリ……。

金属と、金属のふれあう音。

この景観に、似つかわしくない音ではある。

深緑ふかみどりのヘルメットに、迷彩服。

誰も通らない砂利道を、ぼつねんと歩く兵士、独り。

出で立ちは、背中いっばいのランドセルと、右腰に拳銃一丁。

肩からは、AK-108アサルト

背のランドセルには、コップやら小さな鍋やらがかけてある。それらの触れあう音と、小銃が歩くのに合わせて上下に揺れるために、ガチャリ、ガチャリという金属音がするようだ。

荷物が重たいのか、兵士は、五分ほど歩いては立ち止まる。

ふうふうと、息を荒げながらも、彼はその砂利道を歩いていた。

底の厚いブーツは、砂利を掴み、後方へ投げ飛ばす。

吹き続ける風は、彼の汗を気持ちよく乾かしてくれることだろう。

ゴト、ゴトゴト……。

不意に、彼の後方から、不規則な音が聞こえてきた。

兵士は、歩みを止め、後ろを振り向く。

ゴトゴトゴト……。

彼の遙か後方に、一台のトラックが、こちらへ向かってくるのが解る。

ペンキも剥げ、色あせた赤になった、ぼろぼろのトラックだ。きつと、この麦畑のものだろう。

砂利のデコボコに合わせて、左右にぐらぐら揺れながら、それはこちらに向かってきた。

兵士は、右手に拳を作って親指を立てると、トラックに向かって腕を振った。

その間かん、左手でランドセルを降ろす。

少し砂ぼこりをあげて、ランドセルは、接地した。

いっそう激しく、金属のぶつかる音がする。

トラックの運転席からは、腕と上半身を出して兵士に向かって、大きく手を振ってくれた。

ゴトゴトゴト……。

頼りないトラックは、少しずつ、兵士の方へと近づく。

エンジン音が次第にハッキリと聞こえ、やがてトラックは、兵士の前でブレーキをかけた。

今にも止まりそうなエンジンが、色あせたボンネットをブルブルと震わせている。

「どうした、若い。ギブアップかい？」

丸顔の、人の良さそうな農夫は、上半身をのぞかせて、トラックの上から声をかけた。

兵士は、顔を上げると、農夫を見上げた。彼のヘルメットが、ズルッと後ろの方へずり落ちる。

農夫が一寸、顔をしかめた。

「おやおや、女の子かい。」

そして、少し呆れじみた声で、そう言った。

「ベルジまで行くのですが、方向が同じでしたら乗せてもらえませんか？」

兵士は、上げた頭からヘルメットが落ちないように、右手で抑えながら、片言の共通語で、そう言った。

「ベルジ？ ココからまだ三〇kmはあるぜ？ そんな大荷物しよって、歩いて行くつもりだったのかい？」

農夫は、目を丸くしてそう言うと、兵士の後ろの大荷物へ視線を移していた。

「はあ、明日の朝には着くと思って……。」

兵士は、やはりヘルメットを抑えながらそう答えた。少し、元気がない。

農夫が、呆れ顔を深める。

彼……、彼女の胸には、正規軍のエンブレムが付いており、それは黄色で縁取りされていた。

歳は、若い。一五、六を思わせるが、実際もつと若いかも知れない。顔までもすべて覆ってしまいそうなヘルメットと、ガボガボの軍服を見ると、彼女がいかにかに小さいか解る。正規軍でも、彼女の大きさに合う軍服を、用意できなかったのだろう。

「志願兵かい……？」

エンブレムに集中していた農夫は、トーンを落としてそう尋ねた。

「はい。」

彼女は、笑顔を浮かべて、そう答えた。

農夫は、一瞬考えた風に、視線を彼女からそらすと、うなずいた。

「よし、荷台に乗ってくれ。近くまで送ろう。その細い足じゃあ、いつ着くか解ったモンじゃないからな。」

手をボンと打つと、親指で荷台を指さした。そして、豪快に笑う。

「ありがとうございます。」

兵士は、深々と礼をすると、ランドセルを手にとって、幌の中にそれを放り込んだ。

兵士は、あまり高くない荷台によじ登るのに一苦労すると、へたりこむように、荷台に腰を下ろした。

ガタゴトと、頼りない音を立てながら、トラックは動き始めた。ボロボロで、ほとんど役を果たしていない幌の破れ目からは、相変わらず麦畑が広がっている。

入ってくる涼しい風は、兵士の汗で濡れた首筋を、拭うよう

に過ぎ去っていった。

「嬢ちゃん、いくつだい？」

ガタゴト揺れる荷台に身体をまかせて、小一時間か？ 頼りないエンジン音とともに、そんな声が聞こえてきた。

兵士は、首をあげ、前を見た。

荷台は、のぞき窓一つをはきんで、運転台とつながっている。のぞき窓にガラスはなく、声はそこから聞こえてきたようだ。「あ……。四……。一六です……。」

うつろな目をパチパチさせ、意識をすっかり保ちながら、兵士はそう答えた。

「……………」

運転台から、何かつぶやいたような声が聞こえたが、それはノイズの中に混じってしまつて、聞き取ることではできなかった。兵士は、答えが返ってくるまで、のぞき窓を見つめている。

「……戦争を、知っているかい？」

今度は、何とか聞き取れた。

兵士は、しばらく考えていたが、「いいえ」とだけ、答えた。また、何か農夫がつぶやいているようだ。が、それは、兵士の耳には届かない。

「人を、殺したことはあるのかい？」

農夫は、視線を、前に向けたまま、そう言った。

兵士は、おもたい体を引きずるようにして、のぞき窓の下まで来ると、また、「いいえ」とだけ答えた。

「あんたが、何で志願したのか知らんが、今なら、まだ引き返せるぞ。」

そんな声が、兵士にとって、とても優しい声に聞こえた。

しかし、兵士はそれについては、何も答えなかった。トラックは、ガタゴトと音をたてながら、轍にそって、ゆっくりと進んでゆく……。

* * *

しとしとと雨の降る夜、秧鶏くひなは陰気なテントの中で、毛布にくるまっていた。

時折、外で水を跳ね上げる音は、この陣営の夜警が通るときのものだろう。その音が聞こえてくるたびに、秧鶏は、少し首をあげ、大きなテントの入り口へ視線を向ける。

湿気の多いテントは、息苦しい。

時折、砲弾の音はるか向こうから聞こえてくる。この雨の降る中でも、休む間もなく戦闘は行われている。

『南東……。六六二大隊かな……。？』

ただ一人の、女性戦闘員である彼女は、この広いテントの隅っこで、毛布に抱かれていた。このテントには、彼女しかない。

小粒の雨が、テントをしきりに叩く。

バラバラという音は、秧鶏くひなの耳の奥でリフレインする。

パシャ……。パシャパシャ……。

また、水を跳ね上げる音が聞こえてくる。

でも、この音は違う。少し小走りな、今まで聞こえてきた夜警のものではない。

秧鶏は、あわてて毛布から起きあがると、服を脱いだ。

単パンにトレーナーという軽装だった彼女が、それらすべて

を取り去るのに、さほど時間は経たなかった。
パサ……。

水音が止まり、テントの中に光を入れる者があった。
淡い光が、テントの床に台形を作る。

「タマル……タマル……。」

自分の名を、小声で呼ぶ音がする。

秧鶏は、毛布を身体にくるんだまま、上半身を起こした。

そして、光源を見る。

チャリ……チャリ……。

金属の触れあう音をさせながら、秧鶏の方に、明かりを持つた者は近づいてきた。

秧鶏が、右腕をかざして、まぶしい光に堪える。

そして、光の中にいる人物を確認しようとした。

相手の男が、安心したような笑みを見せる。

間違いない。♀だ。

秧鶏も、ホッと一息つくと、笑顔を返した。

「♀さん。」

そして、そう口ずさんだ。

「おまえ、俺の言うこと信じてたのか？」

♀は、毛布の隙間から見える、裸の秧鶏を見て、何か呆れたような声を出した。秧鶏が、少し首をかしげる。

「だって、あなたがこうして待っている。」

秧鶏は、そう言って、顔を赤らめてうつむく。

♀は、短い溜息をもらすと、嬉しそうに笑った。

「いやいや、おまえのそんなところが、俺は好きだよ。」

♀は、毛布ごと秧鶏を抱きしめると、秧鶏に口づけした。

キヤツと秧鶏は驚いたが、そのまま♀にまかされた。

タバコの臭いに混じって、泥と火薬の臭いが混じっていた。

そこで、ふと秧鶏は、今が戦争中であることを思い出す。

しかし、彼女のそんな思いは、男の胸の温もりの中に消えてゆく。

「俺のこと好きかい？」

「……嫌いじゃないから、好きだと思います。」

「要は、一番最初に声をかけたヤツの勝ちだったんだろうなあ。」

「え？　そ、そんなことないですよ。」

「ま、いいさ。この戦争が終わる頃にや、おまえに愛してって言わせてみせるからな。」

彼は、涼しげに、それでいて暖かい笑みを、秧鶏に向けた。

* * *

「秧鶏、帰ってきたってな。」

薄暗いオフィスで、山茶は嫌みったらしく、そう言った。

彼女の顔は、ニヤけている。

バルダーク帝国(WAN)軍務総省地下四〇〇mには、軍務総省(宇宙軍、陸軍、親衛軍が所属)が統括する情報基地が存在する。大銀河帝国全土からの情報が、ここに寄せられていた。オフィスは、情報司令部という名前が付いている。

東京ドームが優に三つは収まるほどのオフィスは、三層に別れており、天井は巨大なスクリーンで、埋められていた。一番下の層では、オペレーターたちが、全国から寄せられてくる膨大

なデータを解析、トレースする。その従業員数、約二万人。第二層では、中間管理職メンバーが、各軍への指令、及び重要データの選別をおこなう。そして、第三層目には、参謀司令総長である山茶の椅子がある。

山茶は、自分のチェアに身体をあずけて、コーヒーをすすっていた。

戦場でどのようなことが起きようとも、彼女の席にまで戦火が及ぶことはない。

彼女は、足をデスクに乗せて、ふんぞり返っていた。

「あたいは、自殺か逃げかと思ったんだけどなあ……。」

鶴が、山茶のデスクによっかかって、腕を組んだ。そして、苦笑いを浮かべる。

「どうやら、賭は俺の勝ちのようだな。」

ニヤけたまま、山茶はコーヒー

た。

鶴のカップにはまだ手が付けられておらず、ゆらゆらと、湯気を上っているだけだ。

「だいたい、至とかいう男が死んだところで、後追い自殺すると思っただけだな。」

鶴は、悔しそうに、顔をしかめる。

「おまえの見解から言うと、秧鶏はどうなんだ？」

山茶が、少し真顔に戻って、鶴を見上げた。

「あの娘は、ハーレムに向かないね。意志も強くないし、流さ

軍務総省、国防総省を仕切る、最高司令官。

一本、二〇億円。

れてバツカリじゃない。はっきり言って、甘い甘い。なーんであんな娘、ヴァルアは連れてきたのかしら？」

掌を上に向けて、鶴は秧鶏を小馬鹿にした。

「だから、帰って来ない方にかけたのか……。」

天井に視線を移して、山茶はそうつぶやいた。何かを思いめぐらしているような、しぐさだ。

「だが、アイツは帰ってきた。……と言うことは、おまえは間違っていたわけだな。」

再び、鶴に視線を移すと、山茶はそう続けた。

「ま、そう言うことになるわね。」

ヤレヤレットと、鶴は立ち上がると懐へ手を入れた。

「いくらかけてたっけ？」

そして、しらはつくれてそんなことを言う。

「ばっくれんじゃねーよ。三〇本だよ三〇本。」

山茶は、三本、指を出して、ニヤける。

「えー？ ウソお？ それは山茶の掛け金と合わせたらだろ？」

眉間にシワを寄せて、鶴が叫ぶ。

「何いってんだよ。掛け金全部、負けた方が都合するんだろ？」

山茶が、デスクから足を降ろし、立ち上がったのと、二人の後方にあるドアが勢よく開いたのは、同時だった。

山茶、鶴の二人が、示し合わせたように、そろって後方を振

り向く。

秧鶏だ。

が、瞬間、秧鶏の姿が消える。

山茶と鶴の間に、何やら、一皿ほどの光の弾が現れていた。

「やべえ……。」

山茶がつぶやき終わる前に、轟音がとどろく。

薄暗いオフィス内が、瞬時にして太陽光を放つと、第三層から煙を上げた。

その煙が、天井へ届かないうちに、第三層が溶け落ちるが、それは、瞬時にして霧散。

警報が鳴り響く。

自動消火装置が、ONになる。

その間、一秒。

次の瞬間、天井の巨大パネル一面にヒビが走った。

天井近く、宙空で小爆発が二発起きる。

片方の爆煙から、彗星状の光の弾が飛び出したかと思うと、遙か後方でズンと音が鳴り、第二層の床全体を振動させた。

ここで、さらに一秒。計二秒。

身体半分を、オフィスの壁に埋めているのは、秧鶏。

秧鶏の身体を壁に押さえつけ、のしかかっているのは、鶴であつた。

バラバラと、壁の破片が第二層の床へ落ちる。

サア――

自動消火装置の消火剤が、今頃になって降り始めた。

空中にあつた二つの爆煙が晴れる。片方には何もなく、もう片方からは山茶の姿が鮮明になった。もちろん、彼女も宙に浮

いている。

警報が鳴りやんだ。

「やってくれたな……。」

山茶がそうつぶやきながら、第二層へフワフワと降りてきた。視線は、天井に向けられている。

天井一面にあつたパネルは、真っ白なヒビが縦横無尽に入っている。時折、パチパチと微量のエネルギーを飛ばしていた。

第三層は、後ろの出口からすっかり溶けてなくなつてしまつている。第三層の金属床が溶け、それが後ろの壁一面に張り付いているのが解る。

第一層では、パニック状態だ。非常灯が明滅し、従業員の声が、響きわたる。

「あたいらに、ケンカ売るとは、いい度胸してんじゃん。」

鶴は、秧鶏の顔をのぞき込んで、薄く笑うと、そう言う。「俺らとやるときは、身体を傷つけてもダメだぞ。」

山茶が、下から見上げて、秧鶏に言葉をかけた。

山茶が、それを言い終わらないうちに、秧鶏は、鶴をはね飛ばすと、鶴のフトコロに入り込んでいた。

右、左、右。

ボディブローを三発打つが、それは鶴の腹部に達する寸前で停止している。

「だから、ボディを破壊しようとしても無駄だって……。あたいらは、物質とエネルギーを自由に操れるんだから。」

そう言って、鶴は秧鶏の拳を払うと、秧鶏と同じ事をして見せた。ボディブロー三発。右、左、左肘。

しかし、それも秧鶏の腹部に到達する前に、停止する。

「へー、やるじゃん。」

鶺鴒が、薄く笑う。

「でも、ハーレム同士なら当てる方法もあるわよ。」

鶺鴒がそう言って、右拳を後ろに引いてストリートを出そうとした瞬間、秧鶏は鶺鴒の鳩尾狙って、アッパを繰り出していった。

「あ、バカ……。」

下から、山茶がそうつぶやく。

ズン!

秧鶏の拳は、鶺鴒の鳩尾を突き破り、肘まで沈んでいた。脊髄を左に避け、拳は鶺鴒の背中から飛び出している。ハーレムといえど、しょせん肉体は人間と同じ組織。この程度ですんだ方が不思議だ。

「ハーレム相手に、超情報体はつかえんぞ。」

山茶の気の抜けた声が、下から届く。

鶺鴒は、呆然としている秧鶏の首を右手で掴むと、上へ押し上げた。ミシミシと、鶺鴒の身体から秧鶏の腕が抜ける。

鶺鴒の指先に、秧鶏の頸動脈の鼓動が伝わる。

秧鶏が我に返った。

時すでに遅く、秧鶏は壁に埋め込まれていた。

鶺鴒の最後のストリートが、秧鶏の腹にたたき込まれる。

秧鶏の口から、内臓ごと勢いよく血が吐き出される。

「だから、こんな楽しみ方もあるんだよ。」

鶺鴒が、低いトーンを出して、秧鶏の体の中にある自分の手を

鶺鴒は、水鶏の脳を、超情報体を通してのぞいていた。水鶏が、超情報体との接続を凍結したため、鶺鴒は水鶏の行動が予測できなかった。

握りしめた。メキメキと音をたてたかと思うと、秧鶏の体中が、強く痙攣する。

秧鶏が、頭部と、腕と、足と、身体とが、まるで別々の生き物のように、バタバタと壁の上でのたうつ。唾液と血の混じった、粘りけのある赤黒い液体が、痙攣することによって、辺りに散った。

秧鶏は、目をいっぱい開き、首をガクガク振る。

ごぼごぼと音をたてて、口から、目から、鼻から、耳から、膣から、肛門から、そして鶺鴒の手元から、血と体液があふれ出す。

異様な臭いが、第三層のあった辺りに漂った。

鶺鴒が、握力をゆるめると、やっと秧鶏の痙攣が止まった。

鶺鴒の腕が、そのまま秧鶏の身体から抜かれ、支えを失った秧鶏の身体は、第二層へと落下していく。

「ちょっと、いじめすぎたんじゃねえか？」

極めて落ちついた口調で、山茶は、まだ宙に浮いている鶺鴒に向かって、そう言った。

「いいクスリよ。」

フン、と鼻で笑って、鶺鴒はそう答えた。

「何いってんだ、一発食らったクセに。」

山茶は、倒れている秧鶏の方に歩み寄りながら、嫌みを飛ばす。

鶺鴒は、それに関しては何も答えなかった。すでに、鶺鴒が食ら

った腹部の負傷は、全快している。破けた衣服も、元に戻っており、血痕さえ見あたらない。

山茶は、秧鶏の髪の毛をつかむと、うつつ伏せになっている頭をグイッと持ち上げた。

「コイツ、自分の身体もロクに治せねーのか？」

山茶は、秧鶏の身体を仰向けにし、上半身を起こしあげて、瞳孔を調べた。

「――！」
秧鶏は、何かうなったようだが、それは空気を振動させるには至らなかった。

周りは騒然としている。

山茶は、将校クラスの者に何か指示を出すと、オフィスをとにした。

* * *

荒地地に立っているのは、二本の影。

小銃と、秧鶏。

盛り土の上に、地に向かって立つ一丁の小銃は、じっと、秧鶏を見下ろしている。

彼のカカトにかかっている、深緑色のヘルメットには、正規軍のマークと、二発の弾痕があった。

時折、火華の炸裂する音が、風に混じって運ばれてきた。

『この音が聞こえてくるたびに……』

今では、震えもしない自分の右手を見て、秧鶏は、心の中でつぶやいた。

そして、自分の肩を抱いてくれた、熱い手を思い出す。

弾の雨が降ってきてても、炎が押し寄せてきても、そして、自分自身を守れなくても、彼は、私の前に立ちふさがる。

秧鶏は、自分の右手の向こうに透ける、小銃へ焦点を合わせた。

もう、この銃は、肩に掛けられることも、弾が込められることも、引き金を引かれることも、ない。

「あなたの主は、もう……。」

涙が、あふれてくる。

水など、のんでいないのに。

喉は、砂と、煙で、からからに枯れ、渴ききっているのに。

まるで、この時のためにとっておいたかのように、涙が止まらない。

……！！

遠くで、また爆音がした。

何か、なま暖かい風が、自分の頬を濡らしたような錯覚に襲われた。

秧鶏は、立ち上がった。

そして、小銃を見下ろす。

今度は小銃が、ヘルメット越しに、秧鶏を見上げた。

彼は、彼女を一瞥すると、薄く笑った。

「元気でな。」

そして、そう言う。

カランカラン……。

風か、それとも偶然か、小銃にかけて合ったヘルメットが、不意に傾き、うつむく。

AK-108 アサルト

ない。主を守るために。この盛り土を守るために、ここに立ち続けなければならない。

秧鶏は、腰にさしてあるサブバイバル

遠くで、爆音がとどろく。

Tamall

芋と彫られたヘルメットの隣に、彼女はそれをつけ加えた。

「バカ、人間ってのは、絶対死ぬような時でも、死ぬなんて考えちゃいないよ。じゃないと、本当に一〇〇%死にじまうだろ。」

「タマルだって、人間だろ？」

人は消えるのに、言葉は消えない。

そこに、人がいる限り。

「芋さん……。私、行きます。」

彼女の足下には、彼女のAK-108が横たわっている。

彼も、まだ斗わなければならぬ。この小さな主を守るために。

秧鶏はしばらく、自分の小銃を見つめていたが、意を決した

ようにそれを拾い上げると、ヘルメットをかぶりなおした。

また、遠くで、爆音がこだまする。

小銃を肩に掛けると、秧鶏は、その、音のする方へと歩きだした。

* * *

「気分はどう？」

ヴァルアは、少し微笑んで、秧鶏に話しかけた。

目を覚ましたばかりの秧鶏は、まだ視界がハッキリとしていない。

しかし、声は聞こえる。

「こ、皇帝陛下……。」

秧鶏は、音を識別すると、あわてて上半身を起こしあげようとした。が、それは体中を走る激痛のために、成し遂げられず、五cm浮いた背中が、また勢いよく、ドサツとベッドの上に落ちる。秧鶏の身体が、半分以上、ベッドの中に埋もれた。

ヴァルアがあわてて、ベッドに駆け寄る。

彼女の手には、盆が乗せられていた。

「無理をしない方がいいわよ。私のことならかまう必要はないわ。」

ヴァルアは、少し落ちついてから、微笑んだ。

バルダーク帝国皇帝ヴァルア

あの戦場を作り出した張本人が、彼女であることなど、誰が心に留めているだろうか？

ふとそんなことが、秧鶏の頭に過ぎった。

ヴァルアが、ベッドのそばにあったチェアに腰を下ろすと、盆をテーブルの上に載せた。

今まで気付かなかったが、ほのかに、ミートズの香ばしい匂いがしている。よく見ると、ヴァルアは白いエプロンを身につけていた。

エプロン姿で、盆を持つ、銀河帝国皇帝……。って一体？

秧鶏は、今までの記憶を一瞬忘れ、プツと吹き出す。

「お帰りなさい。無事で、なによりだわ。」

ヴァルアは、秧鶏の笑みを見て安心すると、優しくそう言った。

そして、そっと秧鶏の頬に接吻する。

秧鶏が、カッと顔を赤らめた。

「ずいぶん長い間、気を失っていたから、おなかもすいているでしょう。」

ヴァルアは、テーブルの上からシチューをとると、ニッコリと笑った。

入れ物からは、ほどほどの湯気が立っている。

彼女は、スプーンでそれを軽くかき混ぜ、そっと乗せると、ふーふーとさます。

「あ、じ、自分で食べれます。」

あわてて秧鶏が、上半身を起こそうとする。

つつ！！

やはし、起きられない。

「はい。」

ヴァルアは、さじを差し出した。

何か、恥ずかしいです。

秧鶏は、少し躊躇したが、身体が動かないようなので、ヴァルアにまかせせることにした。

自分にとって、少し熱めのそのシチューは、口の中で溶ける。

味は、よく解らない。

こんな扱いを受けたのは、何年ぶりだろう。

病気で寝込んだとき、母さまに食事を食べさせてもらった時、以来かな。

そういえば、その時もクリーム

する。

秧鶏は、ヴァルアの顔を見上げた。

ヴァルアが、ニコッと笑う。

秧鶏は、照れた。

どうして。どうしてこんなに優しいんですか？

それとも、私を安心させるために、私の心をあなたに向けさせるために、優しいのですか？

秧鶏は、食しながらも、そんなことを考えていた。

「そうだ。鵺がワインを持ってきていたのを忘れていたわ。」

ヴァルアは、持っていた器をテーブルにおくと、思い立ったように、立ち上がった。

「鵺がね、あなたにと。詫びも込めてね。それにしても、ちょっと安っぽい酒だけ。」

彼女は、キツチンの方へ歩みながら、そう続けた。

秧鶏が、ぼおっと、ヴァルアの背を追う。

しばらくして、ヴァルアは二つのグラスと、一つの酒瓶を持つて、現れた。

コルク栓をはずすと、二つのグラスに、交互に注ぐ。

「秧鶏の無事を祝って……。」

カチン……。

一つのグラスを手にとって、それをまだテーブルの上にあるグラスに軽く当てると、ヴァルアはそう言った。

そして、グラスを秧鶏の口元へと差し出す。

「山茶も、鵺も、あなたに謝っていたわ。許してあげて。」

鵺。山茶。その言葉を聞くと、オフィスでのことを思い出す。

そればかりじゃない。

戦場でのことが、鮮明に思い起こされる。

そして、自分が今までしてきたことも。

自分の手で、多くの命を殺めてきたことも。

どうして……。

「陛下……！」

不意に、秧鶏が叫ぶ。

ヴァルアは、驚きもせず、グラスをテーブルへ戻した。

ヴァルアが、まるで秧鶏の心中を知っているかのように、見据える。

そこに、今までのような優しさと、笑みは見えない。

「陛下は何故、なぜ私にこのような体験をさせたのですか？

……… 鶴さんや、山茶さんのやっていたことが……… 異常だとは思わないんですか？ 私がしたことや………」

そこであわてて口ごもった。

「そして、この私がしていることも、でしょう？」

ヴァルアは、自嘲しているような声を出す。

「いえ、あの………」

言って、しまったと秧鶏くみなは思う。

「例えば、あの二人が、あなたについて賭をおこなっていた事かしら？」

ヴァルアは、今までと打って変わったような落ちついた、低いトーンを出す。

「い、いいえ。私について賭をしたことは、別にかまわないんです。でも、あの戦場の中で、何が起きたのか？ それを知っていれば、あんな事はできないと思います。」

秧鶏は、あわて気味の口調で答えた。

「そして、私もそんなことが平気でできるような人間になるのかと思うと。」

それから、少し落ちついて、そうつけ加えた。

ヴァルアが、下唇を噛みしめる。

部屋は静かだった。

この部屋は、日頃ヴァルアが使っている部屋らしかった。

明るい部屋に、数多くの装飾品。そして、ふかふかのベッド。皇帝ならではの、贅沢な、良く言えば格調高い、そういう部屋だ。

床一面に広がる絨毯は、ヴァルアの足を覆い隠すほどだ。

「そうね、その心は、大切だわ。」

沈黙を先に破ったのは、ヴァルアだった。

「気まずく、おし黙ったままの秧鶏は、ヴァルアに視線を向ける。」

「そして、あなたがハーレムの能力を使おうとしなかったことも。」

ヴァルアは、やさしく笑った。

秧鶏の口元が、安堵感で少しゆるむ。

「あなたは、間違っていないわ。」

そこで、ヴァルアは言葉を切ると、しばらく黙った。

秧鶏くみなは、何か言葉を返さなければならぬのかと思ひ、いろいろ思いめぐらすが、その努力は、数秒で無に帰った。ヴァルアのほうが、沈黙を破ったからだ。

「あなたの持てる力は、確かに人間にとっては強大すぎる。けれども、奇蹟でしか成し遂げられなかったことが、あなたの力のできるのも確かだわ。私は、その能力については、何の制限

も与えなかったし、使い方まで教えなかった。」

ヴァルアは、そう言いながら、テーブルの上に載っていた食器類をフワフワと浮かせて見せた。秧鶏が、ふとそちらに氣を取られる。そんな彼女を見ながら、ヴァルアは、話し続けた。

「例えば今あなたに用意した食事は、人間でできる部分と、私たちの力を使っている部分とがあるわ。この一つ一つのメニューは、私が料理したけれど、何を作るかは、あなたの過去のものをぞかせてもらったし、スープのさまし具合も、用意した量も、人の力ではないわ。」

何を、訳わからないことを……。

秧鶏は、少し首をかしげた。たかだか、料理一つにそこまでする必要があるのでろうか？ 人によって熱さは異なるし、量も多すぎたり少なすぎたりするのも、当たり前なことではないのか？

ただ、メニューの内容については……。

秧鶏は、少し不機嫌になった。

何も、そこまでのぞかなくても。

「私や、山茶たちも、別段この力を特別視しているわけではないわ。ただ、勝手に使ってしまう。人が物をとるときに手を使うようにね。それと同じことよ。私たちなりの生きる努力を、持てる力を使ってやっていくに過ぎないわ。」

そして、ヴァルアは、自分の手を使わずに、浮いたままの器から、浮いたままのスプーンでシチューをすくうと、再び秧鶏の口元へ持っていった。

それを目で追っていた秧鶏は、何気なくそのシチューを口にする。しかし、さっきのようなジーンツと来るような、暖かみ

は感じられなかった。陛下自身が、自分の口元へ食事を運んでくれた方がおいしいような気がした。

「なるほど。」

ヴァルアは、ニコツと笑った。

秧鶏が、怪訝そうに顔を上げてヴァルアを見つめる。

「そうやって、無意識に力を使うのは……。」

そして、そうつぶやくように言った。

「その力で、多くの人が死ぬことにもなるのですから。」

さらに、小さな声でそう続けた。

ヴァルアが、今度は手でパンをむしる。

柔らかめのフランス

はフランス

たのを思い出す。

メニューを決めるのに力を使うぐらいなら……。

いっせ、私の傷をいやすのに使ってくれればいいのに……。

秧鶏は、パンを飲み込み際、ふとそんなことを思った。

そうすれば、別に陛下だって私なんかのために、料理を作る

ことも、こうやって面倒見ることもないのに。

ダメだ……。自分の思考はすべて相手に筒抜けなのに。よけ

いなこと考えなければいいのに。

秧鶏は、顔を赤くして、ヴァルアを見上げた。

「何？」というような感じで、ヴァルアは、秧鶏を見つめる。

そうやってとばけていても、実は……。

またよけいなことを、考えてしまう。

すると、ヴァルアがおもむろに薄く笑うと、話し出した。

「自分のことじゃないからでしょう？ 力を使わないのは。」

秧鶏は、しばらく首をかしげていたが、言葉の意味をつかむと、起きあがろうとした。

「！！」

声にもならない悲鳴が、秧鶏の脳に響いた。

ヴァルアが少し驚き気味の表情をこぼしている。

「自分のことじゃないって……。」

痛みをこらえながら、秧鶏はわずかながらそう言葉を返した。

ヴァルアが、当たり前のように首を縦に振る。

「しよせん、その程度なのよ。私たちの……いえあなた達の間で持っている力というのはね。」

ヴァルアは、乱れた毛布を秧鶏にかけなおしてやると、そうつぶやくように言った。

「そんな、あんな強力な力を、自分のために使うなんて……。」

少し震え気味の声を、秧鶏は出す。

「そうね、ある意味強力すぎて、自分以外には使えないということも言えるわ。下手に干渉すれば、どんな影響があるのか、想像もつかなくなるから。」

落ちついて、腰を下ろしてから、ヴァルアは答えた。

「でも……。」

そして、そう続けて、彼女の言葉は止まった。

秧鶏は、黙って、ヴァルアが語りだすのを待つ。

「確かに、あなたの身体をいやす程度ならば、問題ないかも知れないけれど、自分では正しいことをしたと思って、それが決して人を救っていることになるのかは、別問題よ。」

「??」

「もし、あなたが戦場でその力をフルに使おうとするなら、自分一人で敵地に乗り込んで行って、敵を全滅させることぐらいしかない。そうすれば、味方の軍は全員助かるわ。」

少し、トーンを落として、ヴァルアは秧鶏を見据えた。

秧鶏は、ハツとして、ヴァルアから視線をそらす。

「あなた達の持っている力は、しよせんその程度なのよ。」

最後に、ヴァルアはそうつけ加えた。

その声は、弱気で、脆弱で……。

* * *

「いつから、酒に慣れたんだ？ 入りたての頃、俺に酒をすまされても、断固呑もうとしなかったが。」

山茶は、グラス越しに、秧鶏の顔をすかしながら、そう言った。

グラスの中をのぞいていた秧鶏は、ふと顔を上げ、山茶を見上げる。身長一九〇cmの巨漢は、座っていても充分にデカい。

威圧感と、恐怖感とを、相手に与えるには充分の身体だ。

「あ、いえ……。そういえば、そう、ですね。」

何か腑に落ちないような答えを、秧鶏はする。

自分でも、腑に落ちないからだ。酒が飲めるようになったことが。

いつの間にか……という言葉が妥当なのだろうか？

「そう、わからないんだよ。俺にも。……ヴァルアにもな。」

山茶は天井を見つめて、そうつぶやいた。

「??」

秧鶏は、首をかしげて、しばらく山茶を見つめていた。

沈黙が続く。

秧鶏は、ちびりちびり酒を口元へ運んでいた。

「何故、こうなっちまったのか……。」

天井を見つめたままの山茶は、ぼそりとそう言った。

また、秧鶏が山茶を見上げる。

そして、何のことか悟ると、ゆっくりと口を開いた。

「変わってしまった自分が、イヤになりませんか？」

山茶が、ゆっくりと秧鶏へ視線を移した。

「いやだね、確かに。けどよ、一つだけ思うことがあるんだ。」

そう答えると、山茶は笑顔を見せる。

秧鶏は、興味有り気に、山茶にグッと詰め寄る。

「それはさ、どんなにすげー力を与えられても、人間なんだと思ふことだ。こうやって変わっちまうのも、それをイヤだと思つたりすんのも……。うん、やっぱ俺たちや、人間だよ。」

そして、幸せそうに、彼女は笑う。

カラン……。

空になったグラスの中で、氷が、二つ。わずかに傾いた。

秧鶏は、何か一つ、つかえていたものが吹っ切れたような気がして、少しいい気分になった。

これから、まだ何年生きなければならぬのかわからないが、何はともあれ、この人たちとなら、いっしょにやっていけそうな気がする。

秧鶏も、笑みをこぼすと、一気にグラスの中身を飲み干した。ホントに、何時、お酒になれたのだろう。

その疑問は、彼女に一生つきまとうことだろう。

まだ、人生は、始まったばかりなのだから。

カランカラン……。

水鶏のグラスの中でも、答えるように、氷が踊った。